

飯島賢二の『恐縮ですが・・・一言コラム』

第 149 回 「サダカ」～イスラム共同体を維持する根幹的互助システム

2006.5.14

我国では宗教の話は一種タブー化され、日常的にほとんど話題にならない。しかしこれこそ、世界の非常識といえるかもしれない。宗教の違いで争うことはナンセンスだが、宗教の話をしていないこと自体、宗教が日常生活に全く密着していない、何よりの証拠かもしれない。とはいえ、小生自身、宗教的生活は何らしていない一人である。

でも、今回はイスラム教を論じてしまう。

世界の宗教人口を見ると、キリスト教は約 32.9%、イスラム教は第 2 位で約 19.9% いる。人口にするとおおよそ 12 億人ぐらいになる。ちなみに仏教は 5.9% といわれている。

イスラムの教えの中に、「ザカート」と「サダカ」というものがある。

「ザカート」とは困窮者を助けるための義務的な喜捨、たとえば 1 年以上所有している財産のうち、貨幣の 2.5%、家畜の 0.8~2.5% 等決められている。言ってみれば「税」のようなもので「救貧税」とも言われている。

それに対し「サダカ」は自由喜捨と訳され、制度化されたものではない。政府による福祉とは違い、常に顔を合わせている間柄同士の互助システムといえる。戦争で夫を亡くした家族に対し、近所の人々が声を掛け合い、金銭等を集めて回り、当該家族に直接渡す。あるいはビジネスで成功した人物が、自由意志で慈善団体や個人に喜捨したりする。富裕な人物が、地域共同体に対して学校などを丸ごと寄付することも多い。これは西洋や日本でも見られる行動だが、サダカで寄付された学校などには、決して寄進者の名前が刻まれることはない。それは、個人からの寄進でなく、神（アッラー）からの寄進であるからだ。

今でも「犠牲祭」と称し、富める人が貧しい人に羊の肉を分け与える儀式・慣習がある。1/3 は家族、1/3 は親戚・友人、1/3 が貧しい人へ差別なく分け与えている。イスラム共同体には、こういった仕組みが幾つも組み込まれているのである。

そういえば昔の日本にも、地域社会を支える幾つもの仕組みがあったような気がする。たとえば江戸時代の「五人組」、あるいはついこの間まであった「となり組」。やたら連帯責任ばかり強調され、自由とプライバシーを束縛する悪例として、もはや全く姿を消した。都会に住むことがステイタスで、活気があり便利でいいかもしれないが、隣で殺人が起っても、われ関せずの世界、互助システムも糞（失敬～謝罪）もなかったものでない。

イスラム教を推奨するつもりはない。イスラム教以外の宗教も、博愛、慈悲、慈善奉仕の精神、隣人を愛せよと言っている。人間たる根幹的な観念である筈の思想が、今の日本に全く希薄になってしまっている。「面倒くせえー」「関係ねえ～だろー」という今どきの若者が、自分ひとりでは、一瞬たりとも生きていけないこと、教えてやって欲しい。